



久遠の歩み

所長 竹部 弘



今年、教学研究所は設立六〇周年を迎える。小誌『聖ヶ丘』の「思い出」欄に窺える草創期以来の、先人達の研鑽あつての今日である。

○

教学研究は、信心において本当のものを求める動きが、研究という形をとって進められるところに生まれるものである。信心において本当のものを求めるといふ意味では、教祖御自身がみずからの体験や神からのお知らせを顧みて信心の筋道を求められたように、教学すること自体は信心につきものである、そこに先人が「本教の信心あるところに必ず教学あり」と言われた所以もある。しかし、信心において本当のものを求めることを、研究という形で行うことは、誰もがしなければならないことではないし、できることでもない。とり

わけ、この教学研究所が教団の機関として置かれ、研究がなされているところには、教祖以来のこの道の信心がおのずから欲し求める働きを、教団として進めようとする願いと責任があることは、忘れてはならない。

○

教学研究の課題は、あると言えはあし、ないと言えはあし。課題は教典や本や資料の中にあるわけではないし、かといって自分の中にあるわけでもない。しかし教典や資料の中にあり、自分の中にあるとも言える。この場合の自分とは、現在の金光教や世界を背後にもち、その空気を吸って物事を感じている自分という意味である。身の上下相対的な自分ではなく、金光教や世界を映す鏡としての自分と言えはよいか。そういう自分と教典や資料との間に、あるいは両方の関わり合い、自分を囲む色々なものからの催しを受けた働き合いにあるということだろう。そういうものは、半ば自分が見いだしたとも言えるのだが、半ば以上は向こうから呼ばれたと言ふべきことである。

自分自身のことを振り返ってみると、研究所に入った当初、検討会で質問に答えられず、黙って考え込んでしまうことが多かったのだ、一〇秒以上黙っていたら罰金を課す、と冗談交じりに言われたことがあった。指摘されることが一々もつとも思えて、答えることができなかったのである。

それが二年目、三年目ともなれば、なぜこのテーマを選んだのか、これをして何になるのか、本当にできるのかという思いが兆して来る。誰に勧められたでもなく、自分で選んだにも拘わらず、却って尚更、思いは一入である。しかし、ある時ふと、全教の教師・信奉者の内で教学研究に専念できるのは限られた者であり、その限られた中で自分だけが、この課題を求めているのだと思わされて、課題に対する責任とも愛情ともつかぬ思いが浮かんで来たことを思い出す。

自分の課題でありながら自分の課題というだけではない感触に支えられて、一方ではとうてい自分の手に負える事柄ではないと思いつつ、他方で自分に課された宿題、あるいはむしろ自分もまた大きな催しに導かれて参与しているのであると言いつつ、角度を変え、時を待ち、回り道をしながらでも、探究の試みが続けられる。困難ではあるが実現を待たれているものが、その先に待ち受けていて、それぞれの教学する姿勢によって開かれてくるのだと思いたいし、またそうに違いないと思う。

○

今年元日の新聞記事で、一八代目中村勘三郎の「型があつての、型破り。型がないものは、型なしってなんです」との言葉に接した。型がなければ型を破れないというのは当たり前の話だが、そ

れだけでなく、ある型を身につけるまで習熟した後に、その型を破るものが生まれるという意味かと感じた。

これまでの伝統、あるいは先行の研究と、どのような関係結びつつ、その継承と展開を図るか、そこに「批判的」ということが伴う。しかし批判すべき先行成果について、その値打ちを理解し、自分の研究も何を負っているかの弁えがないと、場合によってはみずからの研究の意義を立てるための批判にもなり、ひいては批判が正しく対象を捉えておらず、すれ違いになったり、批判とは呼べないことになるかもしれない。研究は営々たるものであり、それはこれまでも、これからも変わることはない。その営々たる先に、伝統の批判的継承と展開が生まれ、どのような人・物・出来事に出会わされ、神と人と世界と歴史の風景が開かれてくるか。そのことを楽しみに、これからもうしき歩みが進められんことを。

(兵庫・姫路西教会)

★ 平成26年度の計画 ★

設立六〇周年を迎える本年度は、研究生二名を加え、所長以下、総勢一四名にて出発することとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

【第五三回教学研究会】

六月二八日～二九日に開催します。今年、第一日に本所設立六〇周年にあたって所長による基調講演と研究発表、第二日には川村邦光氏（大阪大学教授）による記念講演「弔いにおける死者と生者―死者への想像力をめぐって―」と全体会（コメント・討議）を予定しています。

【第七回教学に関する交流集会】

九月一三日、全国信徒会にも呼びかけつつ、「信心の魅力をここから」をテーマに、霊地にて教学に関する交流集会を開催します。

【教学講演会】

布教功労者報徳祭時（一二月）に、紀要五四号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

○

この他にも、教団付置研究所懇話会第一三回年次大会（於真宗大谷派教学研究所）や、諸学会への参加等を通じて、広く教内外の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図ってまいります。

また、継続して研究に連動した資料の収集・管理

を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図り、より一層、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えております。

【平成二六年度研究題目】

〈第一部 教祖研究〉

・「神の頼みはじめ」と貨幣経済
―神からの依頼と文治の援助に浮かぶ金銭の意味―
所員 大林浩治

・金光大神直筆資料の表記形態
―特に「願主歳書覚帳」・「広前歳書帳」・「お知らせ事覚帳」における慶応年間の記録の特徴をめぐって―
所員 岩崎繁之

・金光大神における二度の隠居と「天照皇大神」
所員 白石淳平

〈第二部 教義研究〉

・金光大神に見られる死生の問題
―「先祖」に関わる記述を中心に―
所員 高橋昌之

〈第三部 教団史研究〉

・昭和四十年代の逐次刊行物に見る
「教会布教」の諸相
所員 児山真生



での取次の実際や、教団布教施策における大きな課題ですが、教学研究所にとっても、取り組まねばならぬ必須の課題であることに変わりはありません。

教学研究は「本教信心の本教信心による自己吟味」と意義づけられています。それは既存の本教を既存の本教信心によって自己吟味することに終ってよいものか。

かえりみれば、教祖様も、幾多の行き詰まり状況の中で信心の展開をはかられました。それまで最大の依り処であった「祈念」が許されない状況の中から「理解が主」という信心の展開を果されました。願い主の祈念を代行しておかぎを授けるといふ方から、願い主本人がめいめい神に願って「和賀心」でおかぎを授けるといふあり方へ、信心の展開をなすとげられました。

今本教においても、既存の信心から新たな信心の展開が求められる状況に立ち至っているのではないのでしょうか。既存の信心を展開の信心で自己吟味する、あるいは展開の信心を既存の信心で自己吟味することはできないものか。それは、いかにして可能か。研究所もそこへ一歩踏み出していたかどうか、切に期待しています。

(広島・甲山教会)

所長三期目に抱いた密かな思い

元所長 福嶋義次



密かに感じていた。

しかし、『金光教教典』刊行後の諸注釈書の編集刊行、とりわけ用語辞典作成に懸命になっていた。在任中はそれについて発言することはなかった。平成五年六月、国際センター設立準備の当局依頼が来て、六月末、所長職を辞任したこともあり、密かな思いは、意識の奥で冷凍されてしまった。

この度、研究所設立六〇年に寄せて『聖ヶ丘』への、原稿執筆依頼を受け、冷凍されていた課題を意識の奥から引き出してみることにした。紙数が限られているので、端折って簡略に示すことをお許しいただきたい。

研究所設立後四〇年を経た当時、教学研究所の基礎的分野の研究は確かなものになってきていた。そのことは、佐藤光俊所長時代、平成一六年に刊行された紀要第四四号(五〇周年記念

号)に回顧された研究所の諸業績をみれば、身びいきな思いではなかったと思う。それはよしとして、

・・・教学研究所の教学は、本教信仰、その信仰を体現する教団が、所与の世界に正面向き合う姿勢・態勢を質す規範提示、という重要な役割を、積極的に担うべき時が近づいているのではないかと考えた。そのためには、教学研究が、意識的に自己規制もしくは自己限定していた基礎的研究を踏み越える領域―例えば、教師教育、教団・教会布教、教会運営など―へと研究の歩みを進めることがある、と痛感させられた。

研究領域を広げるための考えられる種々の方策のなかで、まずは教育の場に、研究所の研究とその担い手である研究者が深く関わることを取り分け重要なことではないか、と考えた。

その教育の場とは、現教団システムでは、教師養成機関、修徳殿、輔教教育などの場が挙げられる。そのなかで、本教教師養成機関である学院と研究所との関係を根底から見直す必要がある。しかし、現教団では、学院と研究所は、教主統理のもとでの別機関として位置づけられているので、教学研究が教師教育へ直接関係してはならないし、逆もまた不可能である。

そこで、教規改正を視野にいれながら、教学

研究所の御用を頂いて

感じたこと

主事 佐藤幸乃



大学院を卒業して、金光教教学研究所の事務室で御用をさせて頂くようになって三年になります。日々の御用を通して教えて頂いたことは、「研究者は研究を通して信心を問われている。事務職は、日常の御用の在り方や姿勢で信心を現していかないとイケない」ということでした。日頃の行いに垣間見える人となりや生き方を通して、自身の信心が問われているのだと教えて下さったように思います。

研究所に入って間もない頃、私は、何気なく発した言葉の意味や使い方についてよく指摘されました。それほど深く考えて言葉を発していなかった場合が多かった私は、その事によって、半ば無自覚に発していた言葉の持つ「重み」について指摘された気がしました。そんなちよつとした言葉にまで、自分という人間の人間性を問われているような感覚はそれまでになかったもので、最初の驚きとして、深く印象に残っています。

研究所での御用は、教えられたことや与えられた御用だけに取り組みばいいという事ではなく、

自分で先々の予定を考慮して、段取りを考え、早め早めに取り組んでいくという応用力も必要になってきます。考えて行動するという事が苦手で、これまで散々苦なことから逃げ回ってきた私にとって、だからこそ与えられた御用の場所だとも思えます。会議や行事にしても、事前に打ち合わせた内容や予定通りに進行していかなくていいのですが、中々全て予定通りとはいかず、イレギュラーな事態に遭遇することもしばしばあります。そうなると、つい慌てたり、焦ってしまいがちになり、冷静に対処することの大切さを痛感します。ここでの経験は、考える力や行動力を、その時々々の出来事を通して学ばせて頂いているように思います。

以前、教学研究員名簿をばらばらと捲っていた時、囑託の欄に祖父の名前を見つけました。母も助手を経験しており、役柄に違いはあるにしても、三世代がこうして研究所に関わらせて頂いていることに、何か不思議なご縁のようなものを感じます。

また今年には教祖様ご生誕二〇〇年、本所開所六〇周年の記念の節年にあたり、私がこうして研究所で御用させて頂いているのも「ここで子育て頂きなさいよ」という、神様から掛けられた願いの中での今なのだと感じています。

「神様は…氏子の身の上につけて無駄事はな

されはせぬぞ」という御教えがよく思い起こされます。日々起こってくる事柄を通して子育て頂き、ここでの経験を人生の「糧」として頂くことで、ぶれない信心の軸を築かせて頂きたいと願っています。

(愛知・千種教会)

告知

第7回教学に関する交流集会

地方在住信奉者との交流、対話を通じて、教内における教学研究の意義、役割が理解されていくことに努めると共に、教学研究に対する要望を徴することを目的として開催します。

- 1、日時 平成26年9月13日(土) 13:00~16:20
- 2、場所 金光北ウイング・やつなみホール
- 3、テーマ 信心の魅力をここから
トクテーマ 信心の“ここから”として、考えてみたいこと

—仕事・子育て・介護…そして“くらしのかたち”へ—
今回の参加対象者は、主に一般の信奉者です。金光教全国信徒会事務局の協力を得て、ポスター、チラシ等で広く呼びかけています。身近な方への参加方にご協力下さい。

平成25年度研究報告座談会

気づきと促し - 60年の蓄積と今 -

- 参加者
- ・ 児山真生 (司会)
 - ・ 山田光徳 (記録)
 - ・ 岩崎繁之
 - ・ 毛利義幸
 - ・ 白石淳平

児山

今日は、本年度の研究報告検討会を手がかりに、現在の研究動向について話し合ってみたいと思います。まず、初参加ながら、全ての検討会において積極的に質問していた資料室の毛利君に感想を聞いてみたいと思います。

毛利

正直、分からないことがたくさんあり、でもだからこそ、分かりたいと思ひ質問しました。感想ですが、例えば、佐藤報告(「浅尾藩大谷村の用水普請の諸相―御用諸願書留帳」)を手がかりに―、岩崎報告(「神人の関わりとその記録―金光大神直筆資料への課題―」)では、私が筆者か



いく様子を見て、研究というものが身近に感じられるようになりました。

山田

毛利君の、資料を介して研究に対する感じ方が変わったという話を聞きながら、研究者と資料の関係で思ったことがあります。佐藤報告では、未解読の小野家文書を扱っていました。小野家文書を解読するには多くの作業と時間が必要です。そもそも解読する資料を選択することも容易ではない。同じ部屋で見ていた私には、途方もない作業に思えつつ、そのようなことに取り組みようとしている姿を通して、研究者の思いというものが、資料を資料にしていくのだと気づかされました。

白石

資料を解きほぐす過程には、研究する側が解きほぐされるのが当然含まれているよね。

岩崎

その点では、三好業務報告(「資料にみる神道金光教会講社結収」)は興味深いアプローチを示していました。これまでにも、神道金光教会の

ら指示を受けてコピーした資料が用いられていた。それを見て、私自身が研究に関わっていることを実感しました。さらに、そうした資料が研究者によって解きほぐされていく様子を見て、研究というものが身近に感じられるようになりました。

教務資料が多く含まれている「管長家資料」を用いた研究成果が発表されてきているけれど、どちらかと言えば「教政」や「教制」への関心が高かったのではないだろうか。平成二一年度の「講社」に関するデータベースの編集作業が始まる一連の三好業務報告のユニークさは、帳面への書き入れ順のことをはじめ、朱書きの箇所、あるいは押印の様子など、これまで目にされながらも論究の対象となつてこなかった点々に着目したことに表れています。これは、三好先生が資料編纂等の資料室業務を通して資料と向き合う中から生まれてきた着眼点と言え、これら取り組みを通じて、神道金光教会の「教務」執行実態の様相に迫る研究の可能性を浮上させたこと、それはこれからの研究展開に関わる資料の潜在力を示したものであったと思います。

児山

それが展開と言えぬのも、先行研究があるからですよ。これまでの研究によって資料を見る力が養われてきたからこそ、資料から気づきを得ることができたのだと言えますね。

白石

資料や先行研究との関わりで言えば、まず、研究の上で既に明らかになってきたことを後



続の研究者が如何に「当たり前」にして済まさないか。そして、何となくわかってしまっているという意識と、わからないからこそ研究するのだというそもそもの関わる点を考えさせられます。

【見山】 研究所の営みとしては、研究成果やコメントリー類の蓄積がある。そうした蓄積の営みに尊敬の念を抱きつつ、だからといってそれが所与の認識になってはいけない。現在の問題状況を考えるにあたっては、現状を現状と見させている見方自体がまず検証されなければなりません。

【岩崎】 語られてきた金光大神についてもそうですね。例えば、立教神伝との関わりで「四二歳の大患」、「四二歳の大患」との関わりで「七墓」の意味が求められてきた。そうした関係がどういふことなのか。この点に関しては、今回、「七墓」を「理解」との関わりで取り上げた高橋報告（金光大神に見る死生への問い―いわゆる「七墓」の事蹟に注目して―）は新たな試みであったと思います。

【白石】 そうですね。高橋報告は、いわゆる「七墓」の研究ではありませんよね。「七墓」の経験が金光大神に留まらず、当時の参拝者へ語られているところのポイントがあります。それに



よって人間全体の「七墓」になる。それは見方を換えれば、人間全体の蒙る現代の問題が「七墓」を見させていると言える。

【見山】 現代を生きる人びとの切なる思いが、金光大神とのどういう切り結びを可能にするのか。その回路を「理解」に求めた研究方法は、死生という現代的関心を強く意識することを通して、教学としての研究動機に培うあり方へと昇華していると言えるでしょう。今回の研究報告には、他にもこうした現代的問題関心に触発、気づきを得て取り組まれたものがありましたね。

【毛利】 その一つと言える藤本報告（「病を抱えつつ生きていくことへの意味―小幡彦助の事蹟に注目して―」）では、小幡彦助さんをめぐって「自死」という問題にも向き合っていたように思います。先ほど私は研究が身近に感じられたと言いましたが、私も抱えている現代的問題関心に響く事象を扱っていたことも関係していると思います。



【白石】 そうした身近さは、研究の現実感となる一方で、先行研究に込められた往時の現実感というものへの関心を生みます。先の金光大神の語り方にしても、資料にしても、どう描いているかだけではなく、なぜそう描いているのか、そう描かせているものは何かというところが改めての研究関心となってきます。

【山田】 そうした関心に立つことによっては、研究成果が歴史資料的としても読み直され、再活性化されていく道筋が浮かんできますね。

【白石】 山田君が研究成果の再活性化のことを言ったけれど、現代の何がそのような思いを促しているのでしょうか。

【岩崎】 今の発言を聞きながら、例えば、今年の研究報告全体に見られたこととして、「死生」や「儀礼」或いは「教務」とは何かなど、問いの問口の大きな取り組みが浮かんできた。それは、白石君が言ったように「現代の何か」と密接な関係にあるように思う。めまぐるしく、様々な出来事に出会う現状の中で、問いの問口の大きい研究が表れてきているということは、今を生きる我々にも思えます。容易に掴まえない対象の大



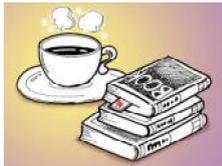
きなものというのが、研究そのもの、研究者という在り方そのものに及んで考えさせられる状況にあるというか。それは問いの構えからすれば紀要一桁台の研究草創期のような、「教学とは何か」を現代社会の中で響くものとして捉え、表現する主体的な眼差しを求めているの営みと言えるのではないでしょうか。



【兎山】 時代社会の影響

研究、資料の蓄積、こうした条件と関わって、今の研究が生まれてきている。それは今年初めてとされている。そこには「教学に関する交流集会」などの近年の影響もあるかと思えます。

今表れてきている間口の大きな問いは、教学研究なればこそ「教学研究」認識を問いに付し、再構築を図っていくとする思いの表れと言えるのではないのでしょうか。そうとして、今表れてきている問いを、何によって、どのように先鋭化していくのか、その契機や手がかりを明らかにしていくことが、ここからの教学研究の課題になってきているように思えます。



研究所の思い出①

研究所の思い出

元所員 藤井 潔



昭和五四年五月一日、研究生として入所し、初めて与えられた課題は、「なぜここに、何を願って、ここにいるのか」を自分なりに言葉にする、というものであった。

「教学は、本来信心の自己吟味であり、信仰生活の拡充展開を本務とする」と、今日も掲げられている教学研究の、最も基本的な課題を、研究生の最初から与えてくださるという、研究所の真摯な姿勢に、あの時から三五年が過ぎ、還暦を迎えた私は、心からの感動と感謝の念を禁じ得ない。

もちろん当時としては、そんな自覚もなく、これは見易い課題、と思って安易に取り組みはじめたが、その作業は、自らを底なしの不安へと導いていったことを、今でも思い出す。研究所で教えられた大切なことの一つは、この「自らを見つめ直す」「自らに向きあう」

ということであり、今も、常に毎日の大きな課題である。

また過去をふりかえるということでもない。安政六年一〇月二一日に金光大神様が神様より賜った神伝の一節に

此方のように実意丁寧神信心いたしおる氏子が、世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ。

とのお言葉がある。生神金光大神取次の祈りを神様から示されたものだ。「此方のように」難儀する人間が、「此方のように」神信心しておかげを受けるように、との取次の願いであろう。

改めて、信心させて頂く者として、神のおかげを受け続ける「氏子」でありつつも、「難儀」でもありつづけるという自らの真実に目を向けることを忘れてはならない。

「難儀」な人間だからこそ、信心しておかげを受け、「神の氏子」と立ち行くことのできる「神人の道」行きを、今月今日の我が身をもつて進めていく、そんな大切な在り方を、研究所のはじめでの研修で教えて頂いたように、今として思う。なつかしくも今に続く道のように。

(広島・尾道西教会)

研究所の思い出《2》

私の財産

元主事 (旧姓宮内)
嶋田真美子



私は一九歳から二九歳まで青春時代を研究所で過ごしました。

当時、私にとって研究所と言えば、頭のいい

エリートが集まりで近寄りたいたいところでした。実際御用してみると、中は「根性で書け!!」と昔のスポ根のような激しい世界で、それに加え昼間はバレー(当時バレーが大嫌いでした。今では大好きになりました)、夜は酒盛りという、ジャングルの中に放り込まれたような感じで、絶対一年で辞めてやろうと密かに考えていました。

高卒で教学の意味すら知らない私は、事務職とは言え時々意見を問われる生活に、難しいことばかり言って実際、これがどのように金光教に反映されていくのだろうかと考えながらも、何とかついていくのがやっとでした。

そんな私でしたが、御用する中で検討会やその後の反省会、また、酒盛りに参加するうちに研究者のある姿に出会われました。それは所員も助

手も、また事務職も関係なく信心を求め金光教を想い、日々もがき苦しみながらも自分をさらけだし、人の問いにも自分の問いにも真摯に向き合っていていく姿でした。その純粹にわかりたいという姿に教学の大切さを思わされました。お結界ではなく机の上で考え、パソコンに向かう、研究所という場所は教師としては信仰とは遠いところにいるようで、実は何よりも信仰に近いところだと感じました。御用をする上でも、研究者には敵いませんが、先輩方にいろいろと可愛がっていただき、台所でハンカチを濡らしたこともありました(笑)が、その先生方の一生懸命さに支えられ、こんな私でも一〇年近くも御用させていただくことができました。

退職して、それまでとは全く違う生活を送るようになり八年が経ちます。困った時には研究所で教えていただいたこと、悔しかったことなど、当時経験したことが、私を助けてくれます。年を重ねるごとに今の自分を認めることや問題に真摯に向き合うことが難しくなっていますが、当時の先輩方の姿を思い出しながら悪戦苦闘の日々を送っています。

青春時代の貴重な一〇年を金光で過ごしたことは少しもつたいない気もしますが、有り難く、今の私の大切な財産となっています。

(熊本・肥後高森教会)

集報

(平成二五年六月一日)

二六年五月三十一日

人事関係

一、職員(教団職員)

○所長竹部弘、六月三〇日で任期満了、翌七月一日付で再任。

○教師毛利義幸、九月一日付で書記に任命、同日付で資料室員に指名。

○所員藤本拓也、三月一日付で国際センターへ異動。

○所員佐藤道文、三月二五日付で辞任。

二、研究生

平成二五年度

○研究生角真紀子、九月一〇日付で解嘱。

○研究生松本周、九月三〇日付で委嘱期間満了。

平成二六年度

○教徒須寄真治、同北村貴子、五月一日付で研究生を委嘱。

三、研究員

○研究員佐藤武志、一一月三〇日付で任期満了、翌一二月一日付で再度委嘱。

四、評議員

○評議員松岡道雄、五月九日で任期満了（二期四年）。

○教師堀尾光俊、四月二〇日付で評議員に任命。

※五月三十一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員一名、助手一名、事務長一名、主事三名、書記一名（計一一二名）

研究生二名

嘱託八名、研究員六名、評議員五名

ニューフェイス

研究生

五月一日、須崎真治さん、北村貴子さんが研究生を委嘱され、入所しました。

入所時の抱負と現在の取り組みを紹介します。

○

須崎真治さん

（二六歳、香川県高松教会）

学院入学の際に、金光教について深く正しく理

解し、自信を持ってこのお道に従事したいという願いを立てていました。

学院では多様な人と出会い、人それぞれの考え方や物の見方の広さ、違いに触れることができ、良い刺激となりました。

これから研究所での御用が始まりますが、学院入学時の願いを改めて持ち、さらなる刺激を期待し、このお道のお役に立っていきたくないと願っています。



現在、研究生としての生活が始まって二週間が経過しました。当面は紀要論文解題が目標としてあり、現在はそのためのテーマを探っているところです。指導所員との懇談や、講座を通して自分の中に深く疑問や関心を確認しています。教内外の図書や紀要論文を読み、自分が疑問や関心を持った部分について、なぜそこに疑問を持ったのか等、指導所員と話し合い、研究的に深められそうな疑問・関心を見つけて、これからの方向性を確かめようと取り組んでいます。その中で現時点では戦争や政治に関連した紀要論文、書籍に当たっています。

指導所員だけでなく他の先生方と話をする機会も多く、その中で幅広い考え方や柔軟な発想に触れたり、意外な方向からの質問を受けて自分の知らなかった自分を見つけることもあったりと、学

院の時とはまた違った刺激を受けています。そういった、日々の刺激を大切に、これからの研究生生活を充実させていきたいと思えます。

○

北村貴子さん

（二三歳、徳島県徳島教会）

クールそうに見られることが多いのですが、飲み会などのわいわいした雰囲気が好きです。心の恋人は（江頭2:50）で、今年中にエガちゃんに会いに行くのが個人的な目標です。

研究所では色々な先生方から知識を頂いて疑問と向き合っていくことが楽しみです！



研究所に入所して二週間が経ちました。やっと雰囲気にも慣れてきて、一日一日が忙しいながらも楽しくてありがたいなあと感じています。先生方は毎日色々なお話を聞かせて下さって、その内容が難しくて分からないときも多々あるのですが、こういう話が分かるようになればいいなあと思ったりしています。

現在私は「祈り」について興味を抱きながら、御用させて頂いています。人はなぜ祈るのか、祈りはなぜ大切なのかという疑問をもとに、論文や本を読んでいます。祈ったからといって、必ずその通りになるとは限りません。しかしこの可能性を心のどこかで思いつつ、それでも何か大切なイベ



研究生入所式後、客殿前庭にて
前列左より須寄、所長、北村

ントのときには神社にお参りしたり、無意識のうち
に手を合わせて神様を頼っている人も多いので
はないでしょうか。ということは、神様に祈ること
とはとても大切なこと、尊いことだという思いが、
人の無意識の中にあるのかも知れません。
この祈りについての疑問に向かい合って、これ
からも考察をすすめていきたいと思えます。

○ お二人は、九月三〇日までの五か月間、レポー
トの作成や講座実習に取り組みます。今後の活躍
に期待しています。



今号も無事発行することができました。執筆のお
願いを快くご承引頂き、寄稿して下さいました皆様にお
礼を申し上げます。

● 本年は、教祖生誕二〇〇年、加えて本所設立六〇
周年であります。昨年の教祖一三〇年に引き続き
のお年柄です。前号のこの欄に、「とかくお年柄と
いうと、その年だけに力が入る傾向にあります。こ
の一年だけのことにならず、・・・一日一日を大切
に」と記しましたが、今年もまた同じ思いを抱かさ
れ、そのような中で願い通りの信心・御用が進めら
れているであろうかと自問しているところです。

● ところで、六〇周年というと、人間であれば還暦
ということになります。それは、干支が一回りして
元にかえるということ、研究所設立時のことを確
認してみると、一名(研究者九名)の職員でス
タートしていることが分かりました。

● 数年来、研究者の確保、育成が願われているな
か、研究者は減少の傾向にあり、本年度は、設立時
に近い職員一二名で、研究者と事務職の人数が拮抗
した状況を迎えました。これまでにない事態に一抹
の不安を感じながらも、節年に与えられた課題と思
い、協力しながら種々の業務を進めています。

「教学は信心の自己吟味である」。この言は、紀要
『金光教学』裏表紙「発刊に当って」(大淵千仞師。
当時研究所長)にある、「教学は本来信心の自己吟
味であり、信仰生活の拡充展開を本務とする。この
故に、その基盤は、あくまで本教の信心に置かれね
ばならない。・・・」を端的に述べたものです。こ
の度、この続きにある「他面また、なんらの教学的
反省、整理をともしない信仰は、如何ほど熱烈で
あるうとも単に偏狭な独善的的信念であるにとどま
り、その信心生活の進展は望み得べくもない」とい
う箇所から気付かされたことがあります。それは、
「信心の自己吟味は教学である」との言い換えも可
能だということ。ここには、教学への別の間口が示
されているように思えます。それは、本誌特集で事
務職員が述べたように、研究者ではなくても「教
学」に向き合おうとする姿勢にうかがえるのではな
いでしょうか。

● 少人数ではあっても、ここまでの六〇年で先人が
築かれた歴史を土台にして、「教学」を全教にむけ
て発信していけるような研究所でありたいと、節年
にあたり思わされています。

発行・印刷 金光教学研究 所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五)四二一三一七
FAX (〇八六五)四二一三一九